様式３号（第５条関係）

令和３年１２月３日

東松島市議会議長 小野 幸男　様

（会派名）自公・清風

代表者氏名　土 井　光 正

# 会 派 活 動 実 施 報 告 書

東松島市議会政務活動費をもって、下記の会派活動等を実施したので、報告します。

1　会派活動の項目（該当を○で囲む）

（調査研究費）、研修費、広報費、広聴費、要望･陳情活動費、会議費

2　活動名称：

（１）青森県八戸市「八戸ポータルミュージアム」視察

新たな交流と創造の拠点としてオープンし、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図り、中心市街地と八戸市全体の活性化効果の考察を行う。

（２）青森県八戸市「八戸市みなと体験学習館」視察

災害時の防災機能も備え、東日本大震災の実情や教訓を広く国内外及び次世代に伝承する施設として登録されている。今後の関連事業推進の参考とする。

（３）岩手県紫波町「オガールプロジェクト」研修・視察

公有地活用型ＰＰＰ(Public-Private- Partnership)の先行事例を学ぶことにより、本市におけるＰＰＰやＰＦＩ(Private-Finance-Initiative)方式の導入可能性について考察する。

（４）岩手県盛岡市「セルスペクト株式会社」訪問・視察

ヘルスケア事業についての展望及び課題について「フリー健康チェックスポット」の設置等ヘルスケア行政推進の参考とする。

3　実施期日：令和３年１１月８日(月)～１０日(水)

4　活動成果：別紙のとおり

5　添付書類：別添のとおり

東松島市議会 受付 3年12.-3

## （1）青森県八戸市「八戸ポータルミュージアム」視察

日　時：令和３年１１月８日(月)　午後２時３０分～４時００分
場　所：八戸ポータルミュージアム「はっち」
出席者：八戸市議会事務局　庶務課　主査　新井田　昇
　　八戸市議会事務局　庶務課　主事　小笠原　直美
　　八戸ポータルミュージアム「はっち」館長　北村　政則

１）視察項目
八戸ポータルミュージアム「はっち」の概要と施設見学

２）視察の目的
新たな交流と創造の拠点として平成２３年２月にオープンし、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図り、八戸の商業、金融、行政等の機能が集まる八戸市中心市街地と八戸市全体の活性化効果の考察を行う。

【八戸市の概要】
・人口　約223，000人（青森県南東部に位置する県内第２の都市）
・水揚げ数量　66，117トン（R1）（全国第１０位）
・水揚げ金額　147億984万円（R1）（全国第１２位）
・八戸は陸・海・空の交通結節点
・八戸は雪が少なく日照時間が長い

３）視察内容

【八戸市の目的】
八戸市の中心市街地は、八戸城を中心に形成された城下町であり、歴史と文化の息づく街として、古くから活況を呈する街並みが発達してきた。
しかし、全国的に、中心市街地の空洞化（歩行者通行量の減少・20年間で３分の１に）や商業機能の低下（平成３年比で43%）が懸念される中、八戸市においても例外ではなく、中心市街地を八戸の「顔」にふさわしい、人々が集い、賑わいのあふれる空間に再生するために、（仮称）八戸市中心市街地地域観光交流施設として整備を始めたものである。

【はっちの目的】
新たな交流と創造の拠点として、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図ることで、中心市街地と八戸市全体の活性化を目指します。

【建物のコンセプト】
「はっち」は八角形の中庭を中心に、八戸の中心街の特徴である路地、横丁のような回廊や、広場のような空間があり、八戸の魅力を再発見しながら、各所で観覧や活動、ショッピングや飲食、休憩を楽しめる立体的なまちとして作られています。

【展示のコンセプト】

八戸の見所や魅力を分かりやすく紹介し、ここから各フィールドに誘うポータル（玄関口）として位置付けた上でその展示作品等は市民作家や市民学芸員により制作され、八戸の資源とともに、八戸の誇りを伝えています。

【事業のコンセプト】

「地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を作り出すところ」八戸には人、物、食、文化などの財産がたくさんあります。それらを地域の誇りとして改めて見つめ直し、時には、新しいものを取り入れながら、育み、新たな魅力を作り出し活性化することで、市民の地域への更なる誇りにつなげます。

まちなか文化施設の新たな在り方を提示したことが評価され、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績があった公立文化施設として、２０１６年度「地域創造大賞」（総務大臣賞）が贈られた。

【はっちの事業】

①会所場づくり（誰でも気軽に立寄れる空間づくり）
②貸館事業（シアター・和室・ギャラリーなどの貸し館）
③自主事業
・中心市街地の賑わい創出事業
・文化芸術の振興
・ものづくりを通した新しい価値の創造
・八戸の魅力発信、観光を通した地域活性化

【施設の概要】

名　称　八戸ポータルミュージアム（愛称「はっち」）
所在地　青森県八戸市大字三日町１１番地１
面　積　a. 建物敷地　3,387 ㎡（番町スクエア含む）
　　b. 延床面積　6,463 ㎡　1階から５階
建物の構造　鉄筋コンクリート造（免震構造）
建物の規模　地上５階　高さ 23.4m
用　　途　集会場
管 理 者　八戸市

【工事概要】

工　期　平成２１年３月２０日～平成２２年１１月３０日
開　館　平成２３年２月１１日
・開館時間　９：００～２１：００
・休 館 日　毎月第２火曜日　12 月 31 日及び１月１日

【総事概要】

用 地 費　785,245 千円（購入費・補償費）
調査設計費　272,326 千円（調査費・設計費・監理費）
工 事 費　3,079,335 千円

【入場者数】

平成２３年２月１１日開館

平成２４年２月　（来館者　888,888 人達成以降毎年１００万人が増）

令和３年５月には９００万人を達成している。

４）効果と課題

全国的に中心市街地の空洞化や商業機能の低下が懸念される中、八戸市においても例外ではなく、中心市街地を活性化させる手段として「はっち」が建設され、人口２２万人の都市にありながら、毎年１００万人が来場しているという事実には驚くものがある。この施設は、市直営で運営されており、用途は集会所とある。そして、事業の中に会所場づくり（誰でも気軽に立寄れる空間づくり）と明記されているが、出入り口が四方にあり私たちが訪問した際も老若男女、とにかく賑わいがあった。各階に休憩スペースがあり学生たちが勉強に励んでいた。

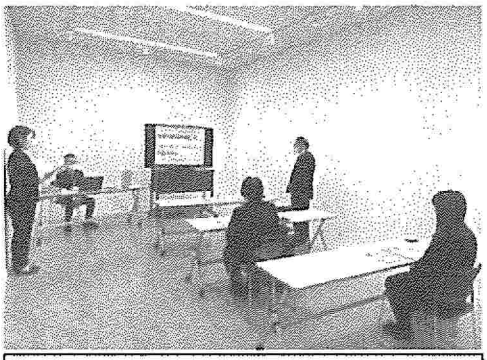
市の直営である「はっち」は、施設利用に伴う使用料が収入の半分を占めており、歳入は約 2,570 万円。一方、維持管理経費やイベントの企画運営及び貸館受付やサポートなどを賄う人件費が主なものである歳出は、約 3 億 5,200 万円。その差額は一般財源から充当している。この施設の目的である中心市街地及び市全体の活性化を考えれば、施設使用料を高く設定することや事業費を抑制することを優先にはせず、維持管理経費の削減を図りながらも市民や市外からの来館者が利用しやすい環境づくりに努めるということである。

自治体の財政が厳しくなると、とかく事業を業者に委託し乗り切ろうとするが、当市の市民重視の行政の在り方には頭が下がる思いである。

しかしながら、他の事業にしわ寄せはいかないだろうか。また、当市では市長選挙が終わったばかりで、市長も交代するという。次期市長も同じ政策を貫くのだろうか、と案じてしまった。

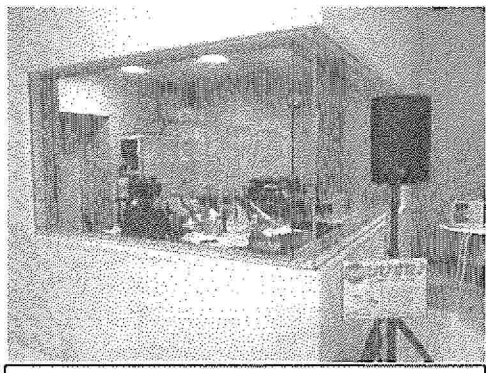
「はっち」という施設は、地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を作り出すところ、本市において最も大きな課題は人口減少をどう食い止めるかということであるが、箱モノを作って終わりではなく、そこに集い、地域の資源を活かしながら、みんなで誇りとして繋げていくことが大事なのだと改めて考えさせられました。

5）視察状況写真

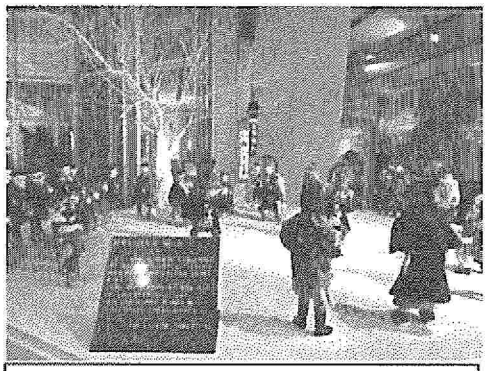


訪問挨拶及び「はっち」の概要説明

八戸地方に伝わる郷土玩具
「八幡馬」が展示された玄関

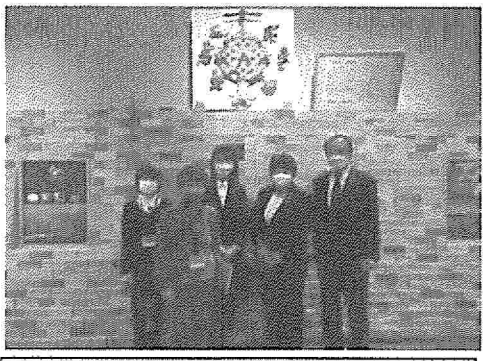


館内放送のほか、サテライト放送が
可能な機材を備えたスタジオ



八戸のえんぶり組人形ジオラマ

八戸朝市のミニチュア再現模型の
説明を受ける



木のレンガ壁と からくり時計の前
で語り部の方と一緒に記念撮影

## （1）-2　八戸まちなか広場「マチニワ」視察

日　時　令和３年11月８日(月) 午後４時１０分～４時３０分
案内者　八戸市議会事務局　庶務課　主査　新井田　昇
　　八戸市議会事務局 庶務課 主事　小笠原直美

１）施設の概要
名　称　八戸まちなか広場（愛称「マチニワ」）
所在地　八戸市大字三日町２１番地１
面　積　敷地面積　1,090 ㎡
延床面積　1,249 ㎡　１階 670 ㎡、２階 456 ㎡、地下 122 ㎡
建物の構造　鉄骨造（地下　鉄筋コンクリート造）耐震構造
建物の規模　高さ　14.8m　　幅　25.7m　　奥行き　30.7m
用　　途　集会所
管 理 者　八戸市

【工事概要】
工　期　平成２９年４月１９日～平成３０年７月９日
開　館　平成３０年７月２１日
・開館時間　６：００～２３：００
・休 館 日　　なし

【総事概要】
用 地 費　　142,918 千円
設計調査費　　114,567 千円
工 事 費　1,652,594 千円

【経　　緯】
第２期中心市街地活性化基本計画（H２５～H２９）に掲載されている三日町・六日町再開発事業の内、三日町側は、中心市街地の中枢に位置し、回遊の拠点として重要であり「はっち」との連携によって中心市街地活性化の効果を最大限に引き出すことが期待できることから、市が主体となって整備するもの。

【マチニワの目的】
八戸まちなか広場「マチニワ」は、街なかの「庭」のような役割を担うことを目的とし、地区全体の魅力向上、にぎわいの創出、回遊性の向上、周囲への効果の波及等を促す新たな拠点を目指す。

【建物のコンセプト】
外観は象徴性を抑えたシンプルなデザインとし、屋根や外壁には、内部の雰囲気を感じることができることで人々が入りやすい空間とする為、また空の景色や時間の流れ、季節の移ろい等が感じられるようにガラスで覆っている。内観は県産材を用いた暖かみのある空間、光・風・水・緑といった自然を感じられる空間とした。

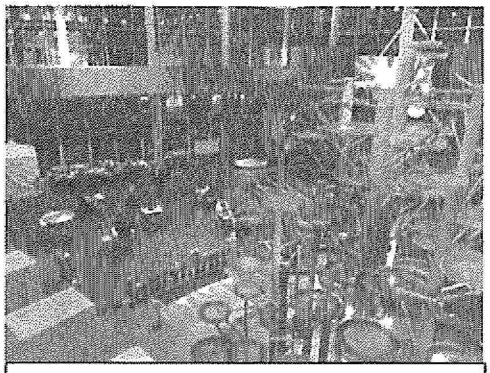
【貸館など】

貸出エリアとして、光の広場、緑の広場、風の広場、ステージがある。2階は、休憩スペースのため貸出は行っていない。また、行為使用については、音楽などのパフォーマンスや移動販売による販売など使用条件を満たした 1 時間単位での使用のこと。

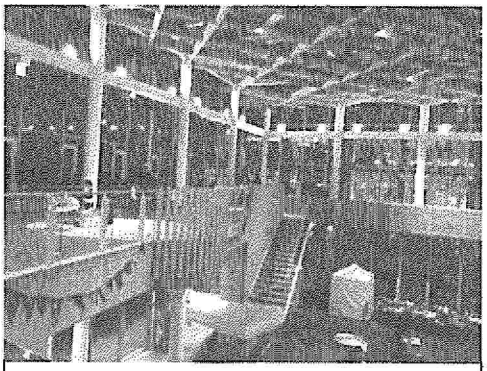
2）効果と課題

八戸で初めてのガラスの屋根付き広場で、雨や雪などの天候に左右されずに過ごせる多目的スペースであること。そして、日中は自然光を取り入れ、夜はまちの行灯として機能する。また、壁面にはバスの運行状況が一目でわかる電光掲示板がありました。テーブルや椅子もたくさんあり、バスの待合いや誰かとの待ち合わせ場所として大いに利用されているようでした。鉄道も通っているが、当市はバス利用客が多いことが伺われた。道路を挟んで向かい側にある「はっち」との連携により中心市街地活性化の効果は大であると思われた。

本市にあてはめた場合であるが、何かをするために人を集めるのではなく、その場が必要な人が集まってくる、人の集まる場所としては共感が持てるものであったが、交通網の違い、生活環境の違いもあり、市の財政面からしても、難しいと思われた。



シンボルオブジェ 水の樹と
くつろぐ八戸市民



2Fでもくつろいでいる様子

バス運行情報が掲示され
待合所として利用

## （1）-3　八戸ブックセンター視察

日　時　令和３年11月８日(月) 午後４時30分～5時00分
場　所　八戸ブックセンター
案内者　八戸ブックセンター所長　音喜多　信嗣

【目　的】
八戸には文豪が多く誕生している。八戸に本好きを増やし、本でまちを　盛り上げるための「本のまち八戸」の拠点とするもの。

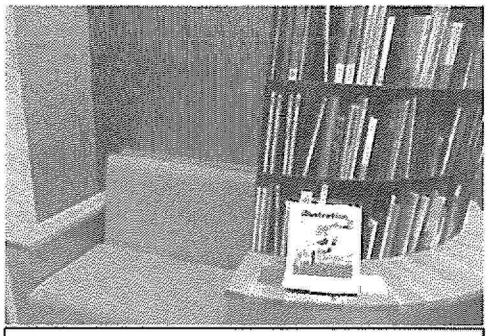
【管理者】
八戸市

【所感と提言】
① 公設の図書館であるが、気に入った本はその場で購入することができるという全国でも珍しい図書館である。
② 一定のテーマごとに編集した本の陳列をしている。
③ 海外文学や人文・社会科学・自然科学、芸術などの分野を中心に専門家ではなくても手に取りやすい内容の本を主として、幅広くセレクトしている。
④ センター内にはカフェもあり、お気に入りの場所を見つけて、ドリンクを片手にゆっくり読書を楽しむことができる。
⑤ 「本のまち八戸子どもプロジェクト」(11/1～1/30迄)
八戸市内全小学校４２校の図書室に配架する書籍購入費に活用するため、ふるさと納税型クラウドファンディングにより、目標金額　220万円を目指し募集中である。

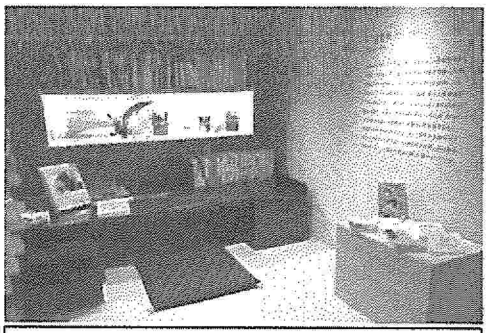
公設の図書館として、これは「はっち」と同様であるが、すべて市民の税金が使用されていることを考慮するとき、費用対効果を考えざるを得ないが、八戸市はあくまでも市民重視である。

青森県内でも、冬は雪が少なく、日照時間が長いと言われる当市でも人口減少の問題は重大な施策が必要と言われているが、あくまでも市民重視の市政は移住定住を考える選択肢の一つとなるだろう。但し、市長の交代により、これまでの方針が継続されるかは今後注視する必要がある。

本市にも市立図書館はあるものの、テーマをもって本を探し求めている方に完全に寄り添ったものではないと思っているので、当市の良いと思われる施策の中で、これから住んでみたい、いつまでも住み続けたいと思えるまちづくりにどのように活かせるのかを、今後検討していきたいと思った。



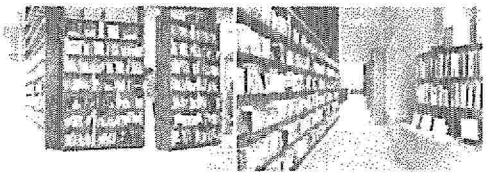
一定のテーマごとに編集した本の陳列



八戸市出身の芥川賞作家
故・三浦哲郎氏の文机のレプリカ

## 館内のご紹介

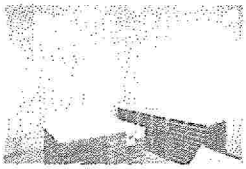
### セレクトブックストア

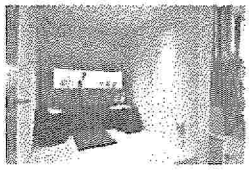


八戸ブックセンターでは、一定のテーマごとに編集した本の陳列をしています。各テーマについては、フロアマップをご参照ください。

### ギャラリー

八戸ブックセンター主催の、特定の作家や作品に関する展示のほか、書道・装丁などに関する展示など、様々な企画展を行います。





### 三浦哲郎の文机

八戸市出身の芥川賞作家、故・三浦哲郎氏が、生前愛用していた小物を展示し、文机のレプリカを読書席としてご用意しております。

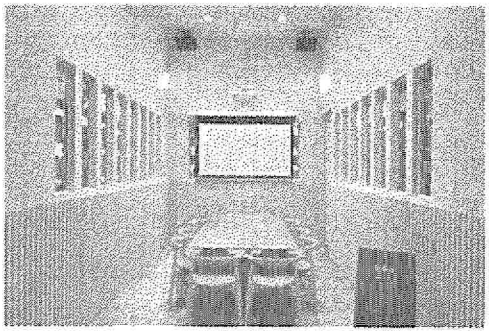
館内で、より充実した読書体験をして頂くために、本棚に囲まれた「本の部屋」や、「ハンモック」などを工夫した読書席をご用意し、ドリンクの販売もしております。（飲食物の持ち込みはご遠慮ください。）

## 貸し出しエリア

八戸ブックセンターの貸し出しエリアは、2種類あります。
どちらも「使用料無料」「机・椅子・Wi-Fi完備」です。
ただし、使用する場合には、お申し込みが必要です。

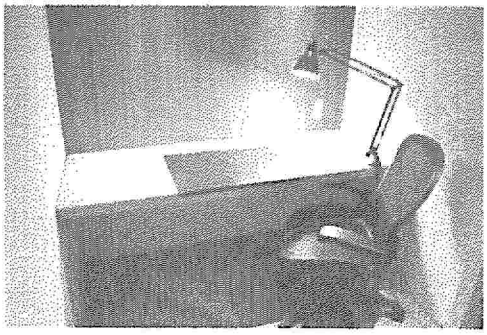
| 空き状況確認 | 仮予約 | 申請書提出 |
|---|---|---|
| （電話かWeb） | （電話かWeb） | （当日館入可） |

### 読書会ルーム　使用想定人数　3～15人



八戸ブックセンター主催の読書会やイベントが行われるほか、本から得た知識や情報、感情などを共有できる「読書会」を開くためにご利用いただけます。

### カンヅメブース　利用には事前予約が必要です。予約用紙やパソコン等はご持参ください。



「出版したい」「発表したい」「連絡したい」「誰かに読んでもらいたい」などといったことを目標にして執筆する方にご利用いただけます。

（2）青森県八戸市「八戸市みなと体験学習館」研修・視察

日　時:令和３年１１月９日（火）　午前９時00分~10時30分
場　所:青森県八戸市「八戸市みなと体験学習館」
出席者: みなと体験学習館　前澤 時廣 館長、指定管理者 川村政則 館鼻公園長

１）八戸市みなと体験学習館施設概要について

青森県八戸市の震※災伝承施設として令和元年７月６日に八戸市の指定管理として開館、館鼻公園内に立地する。3.11伝承ロードの最北端の施設である。
小中学校の校外学習等の団体が多く利用している。

愛称の「みなっ知」は、当時小学校５年生の女児が命名、「みんなが知って勉強する施設であったほしい、低迷している地域に「はっち」のような賑わいを湊にも取り戻したい」との思いが込められている。

東日本大震災の地震発生から復旧・復興までの歩みを映像音響装置や被災写真を用いたグラフィック年表で当時の様子を紹介する施設。また、情報端末による津波映像アーカイブの展示等もあり、津波の脅威を後世に伝える役割も備えている。

※震災伝承施設

東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設で、
①災害の教訓が理解できるもの
②災害時の防災に貢献できるもの
③災害の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの
④災害における歴史的・学術的価値があるもの
⑤その他（災害の実情や教訓の伝承と認められるもの）
以上のいずれかの項目に該当施設と定められている。

◆１階防災学習フロア

１階は、東日本大震災を後世に伝え、学ぶ「防災学習フロア」として、震災タイムトンネル・津波アーカイブからは写真や映像で当時の様子を知ることができる。また、八戸市防災マップや災害に備える防災グッズも展示されている。備蓄倉庫もあり防災機能も備えられている。

◆２階歴史・文化学習フロア

八戸市や湊地区の歴史や文化を伝える「歴史・文化学習フロア」となっており、幅13メートルの大型スクリーン湊ワイドスコープでは、八戸市の歴史や四季折々の文化を紹介した観光情報等の映像を大人数で視聴する事ができる。

◆２階防災食提供のカフェ

防災食を提供しているカフェ【みなとカフェ】があり、実際に防災食のカレーや牛丼などを食すことができる。コーヒーなどのドリンクメニューも豊富であり休憩スペースとしても利用できる。また、防災食や防災グッズを購入も可能。

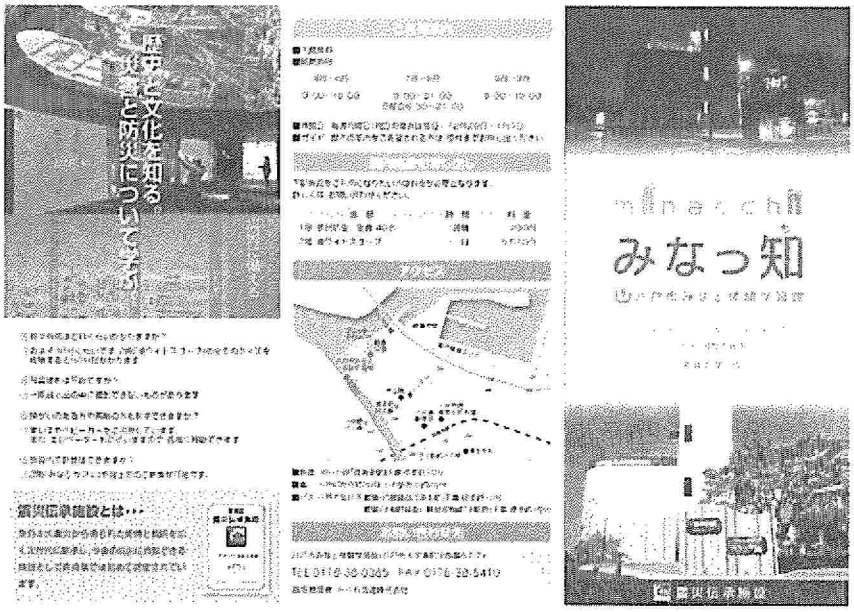
◆２階ベビー休憩室

「ベビー休憩室」には、オムツ交換用のベッドや、ベビーベッド、キッズスペースも備えられている。

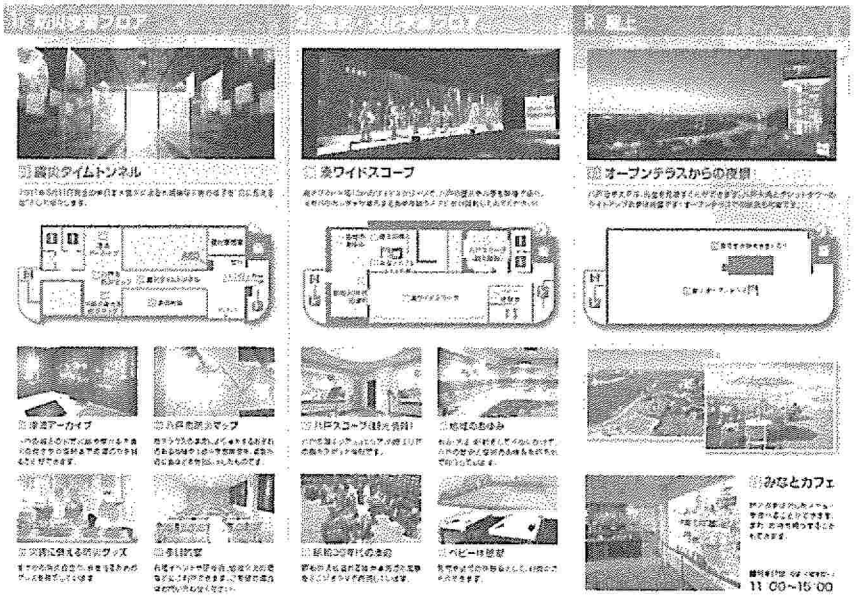
◆屋上オープンテラス

朝八戸港や太平洋、街並みを見渡すことができる。オープンテラスでの飲食も可能。朝夕のテーブルとイスの準備と片付けは施設の職員が行っている。

リーフレット（表）




リーフレット裏



■改善が望まれる課題

①来場者の伸び悩み

②夜の来場者が少ない

③大型バスの駐車スペースはあるが、大型が入る際に狭く注意を要する

■解決の糸口

①地元の方によく知ってもらい、活用してもらうために、八戸市内での周知が必要。子ども用のゲームを利用して学習できる設備もあることから、SNS 等を利用して広く発信する方法を考慮。

②７月と８月は２１時まで開館している（他の月は１９時閉館）、夜来館することの特色を見出し実践する。来館状況を調査し、閉館時間の考慮も検討材料となるのでは

③拡幅可能であるか敷地内や周辺地域の調査が必要

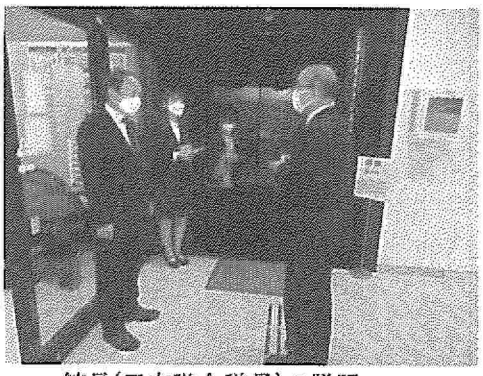
２）所感

東北太平洋側沿岸部沿いに、東日本大震災からの教訓を後世に伝えるための震災伝承施設が各地で整備されており、本市においては「東日本大震災復興祈念公園」が該当する。今回の視察先である「八戸市みなと体験学習館」も同様に震災伝承施設であり、また震災伝承ネットワーク協議会が産学官民の総体で取り組む「3.11 伝承ロード」に登録された施設となる。

前述の二施設は同じ震災伝承施設ではあるが、大きく異なっているのが、体験学習が可能か否かである。震災の教訓から学び、防災教育に繋げていくためには、実際に体験が出来る設備を兼ね備えた施設が教育旅行等においても、より効果的であると考えられる。どの施設も同様に、来場者数の伸び悩みを抱えていることから、地元での周知方法や外部への発信方法を模索し、集客に繋げることが課題であると思われる。

３）視察状況写真

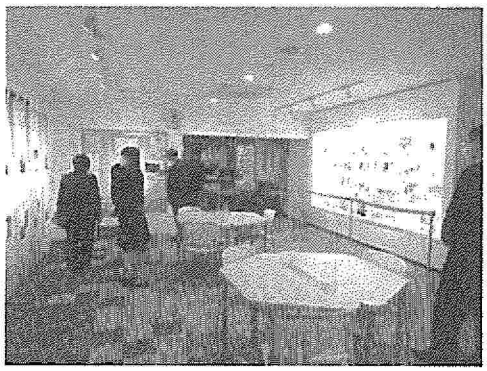
視察挨拶

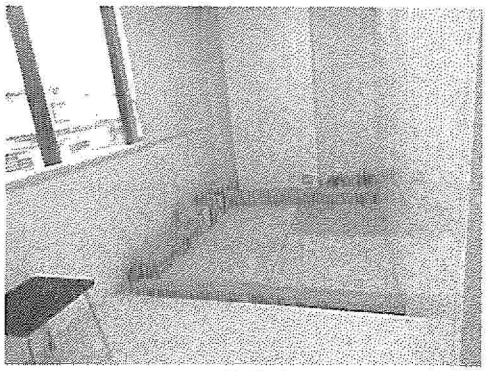


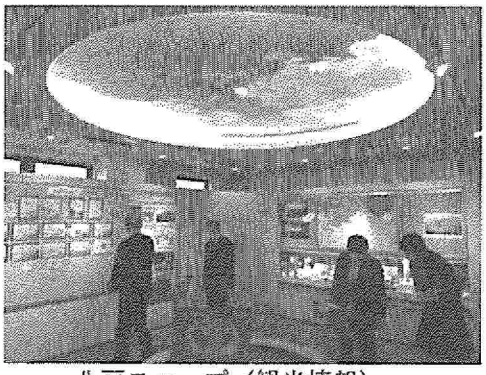
館長(元市議会議員)の説明

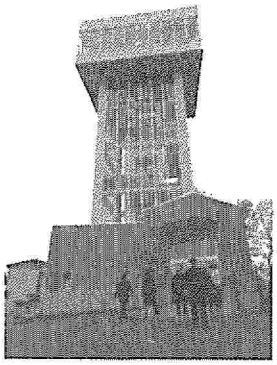
津波アーカイブの説明

八戸市防災マップ


みなとカフェと防災グッズ展示


ベビー休憩室


八戸スコープ（観光情報）


館鼻公園グレットタワー

グレットタワー展望台

玄関前にて記念撮影

## （3）「オガールプロジェクト」研修・視察

日　時：令和３年１１月９日(火)　午後１時30分～4時30分
場　所：岩手県紫波町「オガールベース」研修室
出席者：講師：オガール企画 相談役 八重嶋 雄光
オガール企画合同会社 代表社員 深澤あかね

1）オガールプロジェクト事業概要について

バブル期にこの事業地周辺に移り住む住民の増加によってJR紫波中央駅が新設された事に伴い、紫波町は新駅周辺の開発と土地区画整理事業を計画しこの土地を取得した。しかし、バブル経済の崩壊による景気低迷のあおりを受け、計画は頓挫状態が続いた。その後の景気回復やコンパクトシティ、歩いて暮らせるまちづくりの考えが広がるなか、ＪＲ紫波中央駅「紫波駅の未来を創造する出発駅」とするこの事業の計画が進行した。ＪＲ紫波中央駅前の町有地10.7haを中心にした都市整備を図る為、町民や民間企業の意見を伺い、平成２１年に紫波町公民連携基本計画を策定して始まった紫波町中央駅都市整備事業である。

整備手法に至っては極力、町の財政に負担をかけない手法として「オガール紫波株式会社」の民間会社の設立でテナント等の活用を検討した。このことによって、より良い民間企業のノウハウが盛り込まれる。区画内に整備される公共施設は最小限にして収益を上げられる施設を多くし、事業への投資を募る事に力点を置いた事業。

■　３つの行政課題

①紫波中央駅前の未利用町有地10.7ha
②役場本庁舎の老朽化、分散している庁舎
③図書館新設の要望

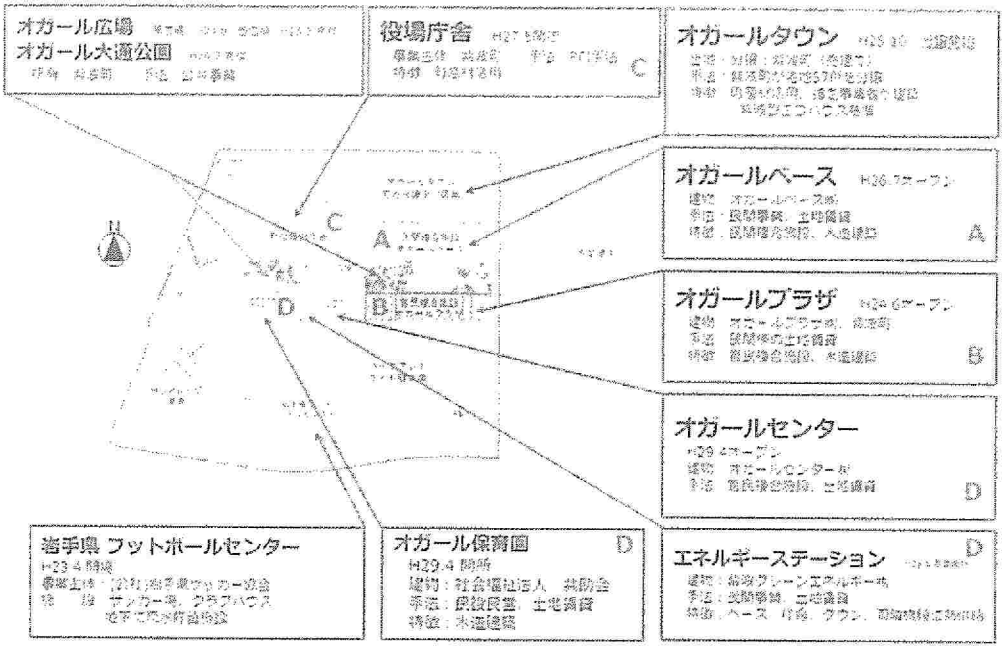
■解決の糸口

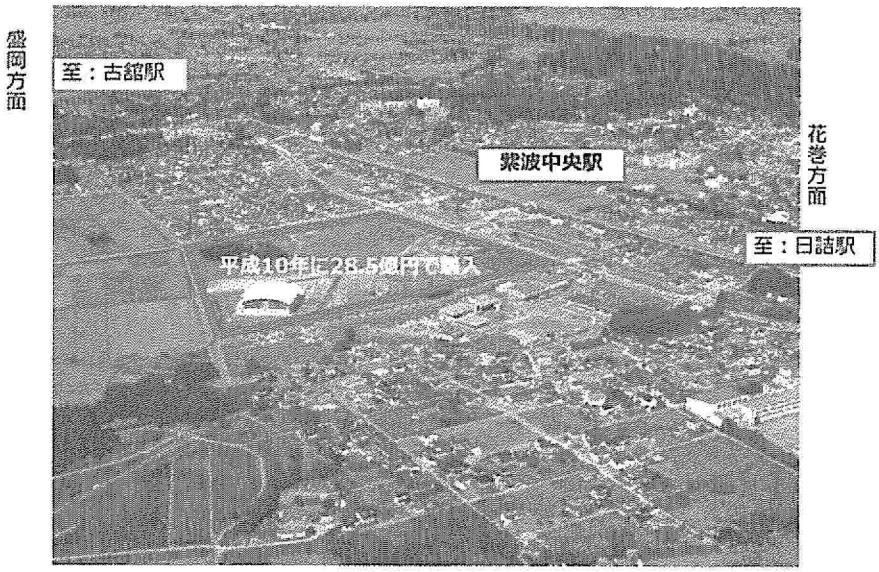
①藤原前町長のリーダーシップ
②ＰＰＰを担うキーマンの存在
③財政問題（H19実質公債費比率23.3%）
④ＰＦＩ事業の実績
⑤東洋大学大学院との協定

■オガールの名前の由来

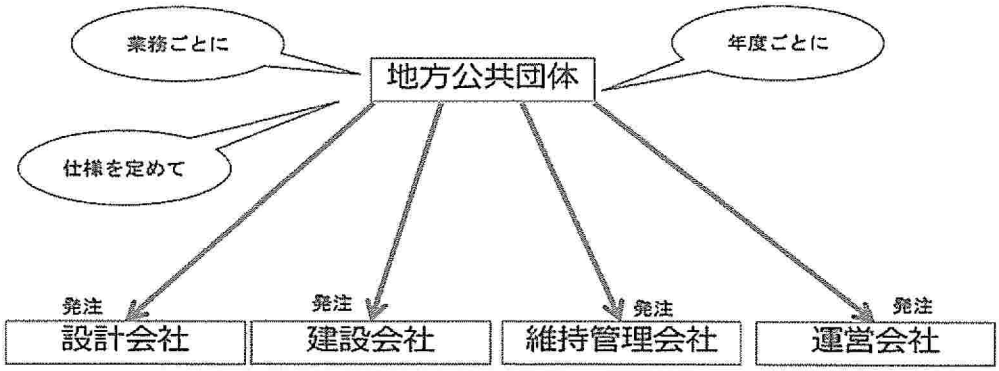
紫波中央駅前（紫波の未来を創造する出発駅とする決意）とフランス語で駅を意味する「Gare」（ガール）＋紫波の方言で【成長】を意味する【おがる】＝このエリアを出発点として、紫波が持続的に成長していく願いを込められている。

オガールエリア内施設の配置と概要

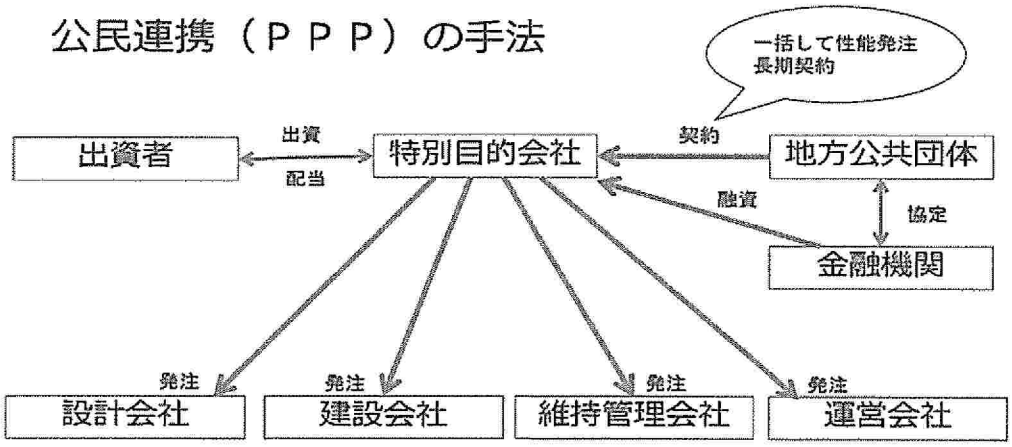


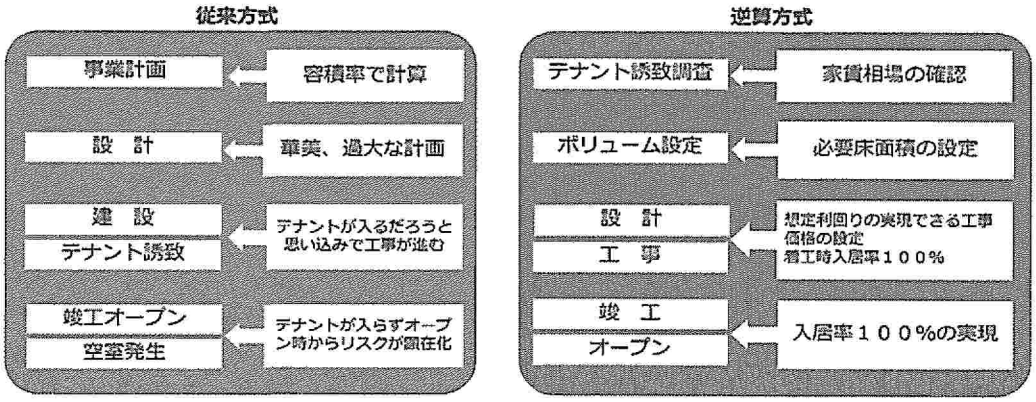
## 従来の公共事業




## 公民連携（ＰＰＰ）の手法




### 逆アプローチの不動産開発



2）所感と提言

民設民営事業や庁舎の建設手法はＰＦＩ、そして民間企業のノウハウや協力を最大限に引き出しながら各種事業をコラボレーションするために「オガール紫波株式会社」を立ち上げた。このことにより、紫波町の歳出を極力抑える事に成功した。オガールタウン内の各種事業の事業手法は前記した表の通りであるが、産直や歯科医、トレーニングジム、ホテル、コンビニ等、収益を伴うテナント活用も多く、タウン内施設の維持管理費も町政に極力負担をかけない形態で事業をすすめてきた。

タウン内の利用実績も来館者、利用者は年間80万人余りで雇用者は301名に及んでいる。紫波町人口3.3万人の環境下でのこの実績は驚愕する数値である。雇用の創出はもとよりエコにも力を注いでおり、町産材の木質チップを活用したエネルギーセンターにより分譲した一般家庭の給湯を始め、タウン内の施設の給湯を66%も賄っている。このタウン内には各種テナントや病院、そして国際認定基準を満たした専用のバレーボールアリーナやフットボール場など、老若男女問わず全ての年齢層が交流する事の出来る環境があり、正に紫波町が目指したコンパクトシティの実現化である。

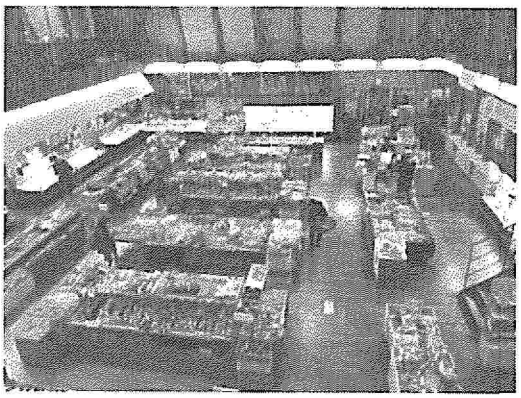
本市においても少子高齢化の波が押し寄せており、コンパクトシティの街づくりも重要課題となっている。震災復興住宅地においては、新たなまちづくりがすすめられているが、まちづくり計画が災害復旧事業という規制で思うように進まないのが現状である。この規制をどのように克服するかが今後のまちづくりのポイントとなる。

又、既存商用市街地に於いては店舗の閉店が度々見られるようになったがこの商用施設をどのようにしていくのか議会でも取り上げられている。民間活力をどのように取り込んで行くのかが今後の課題でもある。

今後の人口減少を鑑みると、この事業手法も視野に入れ生活基盤施設の集約を図りながらコンパクトシティを実現化していくことを検討していくことを提言したい。今回の視察を通して改めて今後のまちづくりが重要課題であり、住みよいまち、住んでみたいまち実現のために、どのように検討していくべきなのか更に考えるきっかけとなった。

紫波町役場

•木造 3 階建ての国内最大級の大規模な木造庁舎。•全面的に町産材を活用した木構造・木質化の計画。•木造と鉄筋コンクリート造の棟を連続して配置し、別棟解釈により面積制限の緩和。



産直「紫波マルシエ」

•地場産品のみを取り扱う店舗。

•売場面積は県内最大級約 200 坪、高さ約 12 メートル。•アーケード上部 2 階は、飲食ができるくつろぎのスペース。

## （4）セルスペクト株式会社視察・研修

日　時：令和３年１１月１０日(水)　午前９時30分～11時30分

場　所：岩手県盛岡市「HIHヘルステック・イノベーション・ハブ」内

出席者：代表取締役　岩淵　拓也

公明党岩手県議会　小林正信

公明党盛岡市議会　太田隆司

1）会社概要について

2014年4月に岩手県盛岡市に790万円の資本金、2人の社員で検体検査サービスを行うベンチャー企業を起業。現在は、資本金約12億9千万円（資本準備金含む)社員48名で運営している。年商2億円。現在、コロナ渦で縮小しているが、約100名の地元雇用を行っていた。

事業の内容はクリニカルラボ(登録衛生検査所)による臨床検査受託サービスを行い、医療機関、行政機関向けの臨床検査受託サービスのほか、非医療としての検体測定室運営(薬局、ドラッグストアー、小売チェーンマート)、消費者向け衛生検査受託サービス、Society5.0 ヘルスケア版を目指した PHR(Personal Health Record)推進事業に取り組んでいる。

秋田県秋田市の秋田県産業技術センター高度技術研究館にパソロジーリサーチセンターを設立している

2）質問内容について

Ｑ１医療・ヘルスケアにイノベーションを起こすために盛岡市に進出した理由

Ａ１岩手県が国の補助を受けて設置したヘルスケア産業集積拠点施設（正式名称：ヘルステック・イノベーション・ハブ）**別添資料**に入居することで研究所や事務所の心配が無く事業に専念できる。

Ｑ２これからのヘルスケア事業についての展望及び課題について

Ａ２現在の個々人の健康は、体調の異常を感じ医療機関に駆け込み検査・診断・治療で健康管理を行ってきたが、当社開発製品の利用により、自身で早めに且つ簡単に検査できるため、早期に治療対応ができる。結果的には早期対応で重篤化を防ぎ医療費削減となる。又、定期的な健康診断を受けられない方も自己健康管理が可能である。

課題として医療機関との住み分けを明確にしながら理解を得ていきたい。

Ｑ３薬王堂と連携で、新型コロナウイルスのPCR検査用の唾液採取キットを店頭販売しているが実施状況について

Ａ３店頭でPCR検査キットを購入し、薬剤師指導のもと唾液を採取し必要情報を記入し店頭にある専用回収ボックスに投入することで翌日にはメールで結果を送付するシステムであり、県の保健所を通さない形なので早い結果を確認出来、結果状況での対応が迅速にでき、感染拡大を最小限の押さえることができる。

Ｑ４ヘルスケアの最新の情報について

Ａ４バイオピリン測定装置・・・虚血再灌流傷害を受けると尿中にバイオピリンという特異的なマーカーが検出される。これを分析することで以下の病態の早期診断に資することができる。（自由診療項目）

- 総合失調症、うつ病（心理ストレス）のステージ判定
- 心不全、心筋梗塞のステージ判定評価など

３）所　感

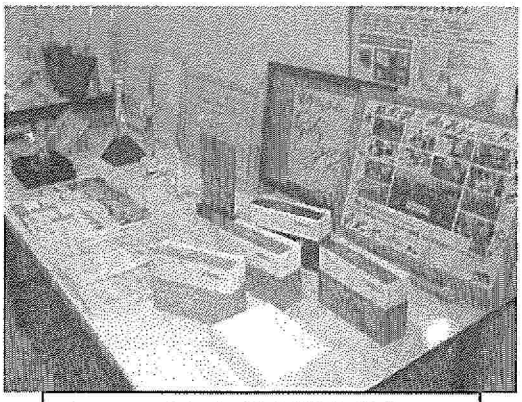
岩手県は、ヘルスケア関連の新事業創出による地域経済の活性化と拠点形成を図るため、工業技術センター敷地内に産学官連携や交流、共同研究開発の活動の場として、貸研究施設を整備運用している。本施設内に入居し、ベンチャー企業として新型コロナ感染におけるPCR検査キット等の製造や検査を行い、飛躍発展している企業のセルスペクト株式会社を訪問した。主な、質問は上記に記載しているが、東北のライフサイエンス機器産業の集積拠点として盛岡市を中心に形成することを目指し2014年8月に設立したTOLIC(Tohoku Life science Instruments Cluster）別添資料という「産学官金連携体」の成功事例でもある。

特に、地方創生拠点整備交付金を活用し、ヘルステック・イノベーション・ハブを設置し、中小企業を受け入れやすく、起業しやすくしている点も見逃せない。今回、セルスペクト株式会社の代表から商品開発経緯や新商品説明を詳細に説明していただいた。その中で、大手メーカー等は、海外の安い労働力を頼りに次々と工場を海外に移転しているため地方進出は無くなった。働き口を失った地方から大都市への人口流失に歯止めがかからない状況となっている。ここで、TOLICにより自分たちの技術に誇りを持ち郷土をより豊かにしていくというポリシーから生まれたこのような環境があれば、中小企業こそ地方で活躍できる場であり、むしろ新しいビジネスチャンスが生まれる。そしてこれからの時代は、世界の知恵を東北に結集し、新たな価値を創造して世界に発信していく時代であると力説していたのが印象的であった。

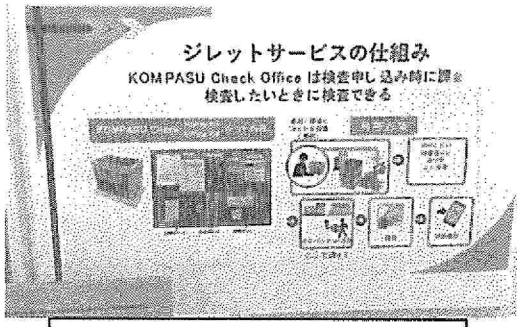
本市においても、石巻圏域の中で企業誘致を含めたビジネスチャンスにどのように生かせるか今後の検討に資していきたい。

HIH ﾍﾙｽﾃｯｸ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ・ﾊﾌﾞ及び
TOLICについての説明

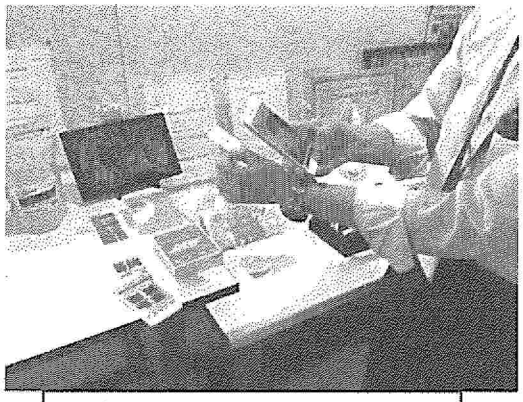
セルスペクト(株)開発製品の説明及び商品紹介



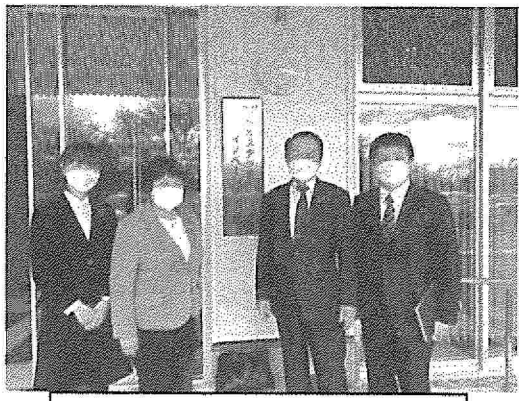
セルスペクト(株)開発商品




ジレットサービスの仕組みについて



検査試薬をスマホのアプリで確認（検査結果が即時に判明）



HIH ﾍﾙｽﾃｯｸ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ・ﾊﾌﾞ前で撮影

| 会派参加者 | | |
|---|---|---|
| 1 | 土井　光正 | 代表 |
| 2 | 手代木せつ子 | 幹事 |
| 3 | 浅野　直美 | 会計 |